

# ペスタロッチにおける政治と教育 (2)

— Idealismus から Realismus へ —

大久保 哲夫

## 1

ペスタロッチの著作「隠者の夕暮」(1780) (以下「夕暮」と略す)と小説「リーンハルトとゲルトルート」(1781~1787) (以下「小説」と略す)はともに民衆教化による社会改善を目的として書かれたことはペスタロッチ研究者の等しく認めるところであるが、さきに考察した「夕暮」は広く衆人の注目を惹きその価値が万人に理解されるには至らなかった。深遠な思想を内に含む断片的な文章は大衆には難解で興味なく、したがって一般的に広く読まれて彼の思想が啓蒙的役割をはたすためには、より通俗的な書物の中での平易で興味深い表現が必要であった。かかる事情のもとにここで主題として取り扱う「小説」が生まれたのである。

もっとも、完成までに7年間も要し内容も4部から成るこの大作は、ペスタロッチが晩年の「白鳥の歌」(1826)において述べているように、第1部は一般家庭で読まれるための「民衆の書」“Volsbuch”として書かれたけれども、第2部以下は読書対象を知的階級とし、(X. s. s. 524~525)物語の展開の興味深い第1部に比してそれ以後は徐々に物語としての面白さを失い、冗長で説教的な表現となっている。またそこに語られている彼の思想も物語の進行とともに変化しており、こうした思想の発展を把握することはペスタロッチ研究において重要な意義を有することである。

そのさい、小説の第1部と第2部は、愛と信頼を基調とし家庭と国家と神の王国が調和的に統一された世界として描き出された「夕暮」の思想と酷似しており、「夕暮」の思想の具体的表現とみなすことができる。それゆえシュタイ

ンは彼のペスタロッチ研究書の中で「夕暮の時期」“Die Periode der Abendstunde”という章に「小説」前半部をも含めて論じているほどであり、私もここでは小説の前半部は後半部への導入として簡単にふれておくことにしたい。

物語の紹介を略して直ちに中心的問題に入るなら、ボンナル村という一農村において、一方に村に不幸をもたらすいっさいの悪の源泉としての人非人 Unmensch の代官フンメル Vogt Hummel があり、他方このような悪を打ち破り村人に幸福な生活を与えようとする領主アーナー Unker Arner, およびその発端をなした善良な家庭の妻ゲルトルート Gertrude があり、ここから物語は展開する。ここにすでに「夕暮」の理想とする敬虔な家庭と親心をもつ君主が現われているのである。しかもこの小説で注目すべきは、代官を中心とする悪の世界が大きく取り上げられていることである。それは貪欲、怠惰、無知、傲慢、虚偽の世界で、それらすべては小説第1部では無信仰の結果とされている。たとえばペスタロッチは、「単純で無邪気な心をもつ善良にして正直な人間は、不幸にあっても無信仰な者よりいっそう分別力がある。……そういう人間は不幸にあっても謙遜で自己の過誤は詫び、困ったときには援助のいる人々にたいし諸方から純粋な気持でさしのべられた援助の手に眼を向ける。いっさいの理性をこえた神の平和が彼の一生の支えであり導きの星である」(I. s. s. 194~195)と述べ、神への信仰は不幸な境遇にある人間を救うものであると説き、それにたいし神への不信があらゆる不幸の源泉であるという。このことは神の親心と人間の子心が人間祝福の源泉であるという「夕暮」の思想を裏から述べているにすぎないが、

ペスタロッチが善の世界にたいし悪の世界を明確に区別しているのは彼の人間観の発展の契機をなすものである。

さて、美しい善の世界はまず信仰のあついでゲルトルトの家庭に始まる。彼女は毎朝夕子どもたちとともに父なる神と領主アーナーに感謝の祈りを捧げ、子どもたちの内面に子心を育成していく。このような母親がいかに偉大な教育者であるかということは、次のことばからも明瞭に知ることができる。「このようにして神なる太陽は朝から晩までその道を進む。汝の眼はその歩みに気づかず、汝の耳はその歩みをきかない。しかし太陽が沈むさい、それが再び昇り果実が熟するまで大地を温め続けるということを知っている。……大地を孕みゆくこの偉大な母の姿こそゲルトルトの姿であり、居間を神の聖地にまで高め夫と子どものため天国を得るすべての女性の姿である」。(I. s. s. 339~340) ゲルトルトの家庭こそは「小さな天国」「ein kleiner Himmel」であり、「神の聖地」「Heiligtum Gottes」とされているのである。

そしてこのような姿は領主の村人にたいする親心にも遺憾なく示されている。彼は貧乏人を教会建築の仕事に雇ったり、貧乏人のために共同牧場の分割を約束したりして、貧民救済や村の改善のために政治的叡知を発揮するのである。しかしそれとともに第1部で重要な役割を演じるのは牧師である。彼は領主に「いかなる立法も役に立たないが、領主の親心があれば村の破滅を救うことができる」(I. s. 240)と説き、また村人への説教でも「神なく愛なき人間は人非人である」(I. s. 147)と、人間存在の根源に神への信仰と隣人への愛の必要なことを説いている。

このように母親の教育と領主の政治と牧師の宗教は小説第1部を通じて美しく描かれており、それはかの「夕暮」の理想とした家庭と国家の姿でもある。

しかしペスタロッチものちに「白鳥の歌」で迷っているように、(X. s. 523)問題は代官という一村役人の個人悪よりも更に深いところにあった。村の退廃は村の顔役や富者のなかにも

根強く蔓延しており、彼等は小説第2部で道徳意識の低い愚劣な行為を遺憾なく示す。すなわち、改悛した代官が牧師にすべてを告白したなら、彼の悪事に関係のある彼等の悪行も暴露されることを恐れ、策を構じてその妨害をしたり、また自己の利益を擁護するため領主の貧民救済策の邪魔をしたりする。そして遂に彼等の悪のすべてが明るみに出される村の集会の日、領主により徹底的に追求される村の数々の横領行為は、人間の悪徳がいかに広くかつ根深いものであるかを赤裸々に示しているのである。

ナトルプがこのことに関し「社会は単に共犯 Mitschuld であるのみならず主犯 Hauptschuld でもある」というように、ペスタロッチはそれを社会を構成するすべての人間の責任として強調しているのである。第2部の最後で代官の生涯について村人に報告する牧師は、代官の墮落の源泉は「かつての城中の無秩序」(I. s. 456)にあり、また村の以前の愛に充ち静かで安定した幸福な生活が根本的に破壊された原因は「当時新しく起こり突然村に入り込んだ木綿紡績の影響」(I. s. 454)にあるとし、それにより村人は奢侈享楽と欲望の生活に墮していったと説いている。政治的・経済的原因により社会が退廃し個人が毒されていくことは環境の個人への作用として今後のペスタロッチ思想において重視されるところである。

また、環境により人間が形成されるという立場に立ち、しかも悪い環境が現に存在している限り、「夕暮」における楽観的な人間性展開の思想も危機に瀕するのは当然であり、牧師は領主との会話のなかで「人間は互に同じものであり、最善の者も容易に最悪の者になるかもしれない」(I. s. 410)なぜなら現実に「我々すべてがこの男(代官)を墮落させた不幸の泉の水を飲んでいる」(I. s. 419)のだからと述べ、人間は絶えず悪への転落の危険性にあるという。しかし同時に代官が善良になったように「深く墮落した人間の内面にも善の感情があり、……最悪の者が最善の者になることもある」。(I. s. 410)こうしてペスタロッチは人間の内に善と悪の二つの可能性を把握し、しかも「人

間は善良であることを好み、再び善になるもの」(I. s. 429)であると述べて人間を善へ導くには宗教の必要なことを説いている。第1部第2部では民衆教化の中心は宗教にあり、牧師に重要な役割が与えられているのである。

しかし「小説」で特徴的なことは、経済的問題がペスタロッツの関心事となっていることである。家庭教育に関しても、最初のころゲルトルートはひたすら子どもの心情陶冶に注意をむけているが、第2部ではゲルトルートは「貧困と落胆が人間のあらゆる家庭精神を墮落させる」(I. s. 295)ということを知り、家庭教育を単に心情の陶冶のみとせず、貧困を克服し幸福な生活を営むための具体的方法として子どもたちに糸紡ぎ *Spinnen* や縫い物 *Naehen* などの労働を教え、それによる子どもの収益をも期待している。領主もまた貧民に経済的安定をもたらすべく種々の新たな経済政策を施行しているのである。

このように「小説」では教育と政治の根底に経済問題が大きくクローズアップされてきており、「夕暮」で美しく語られた理想主義では生々しい現実を決定的に解決しえなくなっている。ここにそうした現実認識に立ちそれに即した解決が要請されているわけであるが、では「小説」のボンナル村にも描かれた経済問題とはいかなる事情にあったものか。当時の経済的変貌とそれの民衆生活に及ぼした弊害についてふれておこう。

## 2

この小説にもみられるごとく、当時は未だ中世荘園の形態をとる封建的土地所有関係が残存していた。もちろん農奴解放により賦役は廃され、古典的荘園のばあいほど領主による圧迫はなく、農民は土地および生産手段の所有者として自営的性格を強くしていたが、十分の一税や地代等の税は領主に払わねばならなかった。そのさい「小説」の代官フンメルのような直接土地を管理する下役人が大きな勢力をもっていた。

ベルンを中心としたスイスの西部地方は農業を主な生業としていた。農民は全く単純な方法

で土地を耕作し、三耕圃制度が未だ支配的であり年間の休閑地は農民全体により牧場として利用されていたが、クローバーや他の家畜飼料との交替法が知られるようになると、休閑地は廃され農民に分割された。領主は封建的關係を維持するためにさまざまな政策を用いたのであり、それは小説中の領主アーナーの政治のなかにもみることができる。

しかしこの間に都市における貨幣経済の発達により換金農業を営む農民も現われ、農村でもすでに貧富の差が生じいわゆる農民層の分解が起りつつあった。富裕な農民は僅かで、残りの多くは日傭人として働いたり都市に流れて手工業や兵役に従事したりして生計を営み、また労働意欲のない乞食も多かった。都市に発達した商工業が封建的な農村を動揺させ始めたといえよう。

中世の農村が荘園で代表されるなら、中世の都市はギルドで代表される。そして封建的土地所有関係の矛盾激化により一部の農民が都市へ流れると、都市ギルドは急速な発達を遂げ、それと同時に従来の注文を主とした生産から商品生産へと性格を変えていく。やがて市場と結びついた商品生産者が商人としての性格を強く示して原料購入や卸売等にも手をのばし経済的な勢力を得てくると、都市手工業も矛盾を生じ都市の枠を越えて農村へ侵入するのである。工業は農業生産で十分な収益を得ない農民や無産の日傭人と結びつき易かった。なぜなら工業は以前より多額の収益を彼等にもたらしたからである。ところが、工業が発達して収益が増し他方商業の発達により出費が増大してくると、農業生産のみの農民はいっそう窮乏化してくる。

そのさい、商品生産によりたとえ僅かでも剰余生産物を貨幣の形で貯えていた農民は、みずから工業生産へと移行した。しかし初めは工業生産に従事する農民の多くは一方において農業を営み、あるいはみずから生産する原料で工業を営む半農半工の生産者であり、工業は副業的なものにすぎなかったが、やがてこのような農村工業も都市の独占的な工業に支配されるに至る。すなわち都市ギルドに基く商業資本をもっ

て農村に入った商人のなかには、貧民を従えその地方の地主になる者もあり、資本の力で領主と結びつきますます勢力をえてくる。そして労働者に貨幣や生産手段を貸しつける間屋制前貸資本家として農民の剰余生産物いっさいを独占し、生産は各家庭で個別的分散的に行わせて製品の販売も独占するのであった。ゲルトルート<sup>7</sup>の家庭ではこのような経済機構のなかで木綿紡ぎを行って現金収入を得ていたのであり、またペスタロッチ自身の実践活動をも、農業経営に失敗したのちノイホーフにおける貧児救済の学園で、最初は農産物による収益のみで学園の経済を維持しようとしたがやがてそれが不可能であることを知り、(VII. s. 1) 子どもたちに綿紡ぎをさせている。そして「ノイホーフ便り」(1777)のなかにも彼の住んでいる地方は農業だけですべての住民を養うには不十分であり、すでにこの地方に拡がっている工業が加わらなければならないと述べている。(VII. s. 32)

このような経済的動揺のなかで農民の生活はどのような変貌を示したのであろうか。ペスタロッチは周知のように幼少のころから単純無邪気で活動性に溢れる農民の姿を理想とし、絶えずそれを求め続けてきたのであるが、すでに小説のなかでみてきたように、酒を飲み盗みを働く貧民や貧欲で狡猾な富裕農民など、腐敗墮落した農民の様相が細く語られている。

そしてペスタロッチは、当時「スイス週報」のなかの「農民問題」(1783)という論文でもこの問題をとりあげ、農民の退廃が工業化により一層大きくなったことを次のようにいう。農村において「不純な工業労働は純な農民を全く別人にする」。たとえば、羊毛紡績女工は不潔、吝嗇。浪費的で、絹織女工は反対に虚飾家であり、綿織女工はその中間である。また「モスリンの布に花卉の型を切り取るだけのことをする少女、年から年中唯一のハンドルと取り組んでいるほかは何もしないような紡績工」は、そのような労働の単調化により漸次軽薄無思慮な人となり、それゆえいっそう感覚的享楽を求めようになる。商人はすべてこのことに心を使い、思慮あり注意深くよく家政を保ちうるのに、

機械的労働に従事する者はこれらすべてに欠ける。また同じく工業従事者でも家庭労働と工場労働では異り、工場労働者はいっそう悪い。(V. s. s. 70~73)

村全体の混乱もまた著しい。最初に工業に流れる日傭人や下層農民の多くは知的道徳的に欠けるところがあり、労働による収益をすべて浪費し不幸な状態から抜け出すことができない。かつて彼等を圧していた富裕な農民の生活を今や軽蔑し、また農民たちも生計を維持するためには工業へ向わざるをえなくなってくる。こうして工業は「家庭の秩序を破壊し、教育的な雰囲気<sup>8</sup>のなかで家庭を維持することを不可能にし、村全体を混乱に陥す」(V. s. 78)結果になる。ペスタロッチの表現を借りるなら、農村に侵入した工業は「子どもがメスカ錠<sup>9</sup>を手にしたように」(V. s. 80)振舞い、民衆の生活を混乱させたのである。

このような経済的・社会的変化を「ヨーロッパにおける状況の本質的变化」(V. s. 101)と認めるペスタロッチは、それを否定するのではなく、むしろそういう現実を認識しそれへの対処の道を求めているとみなすことができる。それは「小説」の後半部では新しい学校の設置と法律の制定として示されている。それは「夕暮」や「小説」前半部の理想主義的傾向から現実主義への発展であり、次にその具体的な思想とその基礎をなす人間観について考察したい。

### 3

シュプランガーはペスタロッチの教育思想研究にあたり、「我々の忘れてはならないことは工業の問題——すなわち、家内工業という変化した経済状態において必要な教育という問題——がペスタロッチの教育思想の原動力となっている事実である」と述べているが、それが最も顕著に現われているのが「小説」後半部においてである。そこではまず領主が村の事情をより詳細に知るため新興の紡績業者メイヤー Baumwollen Meyer を訪ねて意見を求め、メイヤーはそれにたいし新しい学校の必要なことを次のように述べている。

かって人々が農業により生計を営んでいたころは、子どもたちにとって「厩や土間や森や畑が真の学校であり、いたるところになすこと学ぶことが沢山あり、それゆえ学校はぜんぜんなくても十分一人まえの人間になれた」。しかし木綿紡ぎが村に入ってから事情は一変し、節約を知らない民衆は現金の収入により浪費的になってきた。そういう現実では「墮落した糸紡ぎの親たちが自分の子どもを秩序ある思慮深い生活にとどめたり、そこへ向わせるとは考えられないので、木綿紡ぎの続くかぎりこうした家庭の不幸は絶えないか、それとも子どもたちのために両親からは得られないけれども彼等に不可欠なものを充たす施設を設けるか、そのいずれしか残されていない」。(Ⅱ. s. s. 10~11)

ところで、すでに述べたようにペスタロッチはこれまで両親のもとでなされる家庭教育を尊重しており、「夕暮」では不自然で無意味な言語教授に墮した当時の学校教育を痛烈に批判している。(Ⅷ. s. 4) さらに「クリストフとエルゼ」(1782)の第14話および第23話のなかでは、教師による教室 *Schulstube* の教育を両親による居間 *Whonstube* の教育と比べ、従来の学校教育の否定さるべき理由をあげている。

(Ⅲ. s. 163, s. 272) 同時にそこで新しい学校の理念が予感されているが、それは未だ明確なものではない。それがここでは工業化による居間の破壊を契機として劃然としてきているのである。

それはまた、家庭教育に代るべきものとして学校教育が重視されたと同時に、救い難い村の腐敗に処してペスタロッチが純真な子どもにこそ将来への期待をかけたともいうことができる。事実この第3部を通じて純真無邪気な子どもの世界が美しく描かれている。さらにペスタロッチが未来へ希望を託していることを示すものとして、民衆啓蒙のための領主の施策は青年層の指導にまで拡大されているが、長期にわたって悪習に染まってきた老人たちは依然として頑迷なものとして描かれている。

さて、現実的視点にたつて現状の打解を中心に推し進めていく新しいタイプの人物として、

退役士官のグリューフイ *Leutnant Gluefi* が登場する。彼は社会と人間についての現実的な理解と実行力をそなえた活動家であり、村の改善にあたり牧師の力量に限界を感じたペスタロッチは、「村全体を全く新しい鑄型に流しこみうる人物」(Ⅱ. s. 42)としてこの士官に期待したのであった。そのことは士官の牧師批判にも示されている。士官はひそかに牧師を評して「彼は人間を知っているがまた人間を知らないともいえる。……彼は人間から何か正しいものを作り出すことはできない。好意により人間を墮落させるだけだ」(Ⅱ. s. 216)という。人間や社会の現実を知ることにかけてきた士官にとり、人間の善性を単純に信じ説教により民衆の心に訴えようとした牧師のやり方は不十分だと思えたのである。

士官は牧師との対話のなかで、「行為こそ人間を教え人間を慰めるものである」(Ⅱ. s. 57)と述べて、言語への依存を避けて行為による体験を人間性陶冶の第一の手段として重視している。もちろん行為の尊重は「夕暮」にもすでに見られ、そこでも人間の陶冶はことばによるよりも感覚的手段から出発すべきであるとされていたが、士官が「人間は決して喜んで自自然的に行うものではなく、ただ必要に迫られそれにたいし習慣づけられているとき行うのである」(Ⅱ. s. 216)というとき、「夕暮」における人間性の自然的発展の思想よりも、むしろ外からの習慣づけ *Gewoennen* が強調されているのである。ここに「育児日記」(1774)におけるルソー批判のあの「服従」*“Gehorsam”*はいっそう徹底され、「強制」*“Zwang”*、「矯正」*“Umbiegung”*が人間陶冶の重要な手段となる。それは人間の内にある善なるものを開花させようというのではなく、人間の外から何か正しいもの *etwas Recthes* を作っていかうという立場であり、かかる思想の根底にはのちに詳しく述べる人間性不信の念が存するのである。そのかぎり、人間性の善なることを信じて墮落した民衆の救済にあたる牧師の好意をむしろ人間を墮落させるものと批判したのはけだし当然である。新しいタイプの人間像とはこのようなイ

メージをそなえた人物であり、このような人物のもつ人間観・社会観を基礎にして村の改善が遂行されてゆくのである。

まず、村の学校教師を依頼された士官は、学校の必要性を説いた紡績業者メイヤーと新しい学校について相談し、作るべき学校の具体的なモデルとしてゲルトルトの家庭教育を参考にして学校を開設した。新しい学校の根本理念は「子どもたちを将来の生活に必要ないっさいのことがらに確実に慣れさせることにより、真の生活の知恵 *die wahre Weisheit des Lebens* へと導くことを目標とする」(Ⅱ. s. 212) ということばに示されているように、第一義的には将来の社会生活や職業生活を十分にはたしうるための準備教育であった。換言すれば、よき農民 *rechter Bauer* やよき紡績工 *rechter Baumwollenspinner* となるための学校という理念に貫かれていた。それは労働により生活の資を得るための労働学教 *Arbeitschule* であり、民衆の子弟の将来のために必要な民衆学校 *Volkschule* であった。

このような性格の学校では「真面目で厳格な職業陶冶 *Berufsbildung* がいっさいの言語教授 *Wortunterricht* に当然先行しなければならない」(Ⅱ. s. 210) というように、職業教育が中心におかれている。もちろん技術教育のみでなく、読、書、算という基礎教育も行われたが、それらはすべてあのゲルトルトの家庭教育がそうであったように労働と結合しそのなかで教えられた。そのうえ「あらゆる階層や職業や各地の道徳 *Sitten* は、人間にとって非常に重要なものであり、彼の将来の幸福と平和はこの道徳を十分身につけるかどうかにかかっている」(Ⅱ. s. 210) という観点から、道徳教育 *Sittenbildung* を重視し、職業教育と結合させている。このように労働を中心として知識や技能や心情を陶冶する人生の修業時代 *Lehrlingszeit* が学校教育であり、それを経たのちに社会人として十分な生活を営むことができるのである。それは、人間性陶冶を第一とし職業陶冶はそれに従属すべきを説いたあの「夕暮」の教育観から発展し、むしろのちの著作「探究」(1797)

<sup>注9</sup>

の、幼児期——自然状態——を経た青少年が、修業時代——社会状態——の試練を通して親方 *Meister* ——道徳状態——に至るという人間生長の思想を予感させるものがある。

ところですでに述べたように、ペスタロッチは小説第2部で村の腐敗は単に一個人の悪事に由来するのではなく、むしろ彼をも包含する社会環境にその原因のあることを知り、それにたいし学校という新しい秩序のなかで子どもたちをよき社会人、職業人へと形成し村の秩序を回復しようとしたのである。それは家庭という自然の秩序のなかで自然の教育が営まれ、それが無媒介に国家の成員を生み出したあの「夕暮」と異り、失われた家庭秩序に代わるものとして学校という新しい人為的環境のなかで教育しようという思想である。更に注目すべきは、その教育はいっそう社会生活、郷土生活と密接に結合しているということであり、ナトルプはそこに彼の社会教育学 *Zozialpaedagogik* の具体的な姿を見ようとしているほどである。この社会生活と結合した教育について士官は「人間の教育は、すべての人間が一つに結合されている大きな鎖の一つ一つの環を磨きあげて、全体を完成するものにほかならない」(Ⅱ. s. 217) と述べ、人間を社会的存在として把握し、個人の教育は同時に社会全体の教育に通じることをあきらかにしている。個人の教育は社会の構成員としての個人の教育であり、個人に社会人としての教育を与えることにより社会全体の秩序は維持されるというのである。

しかも周知のようにペスタロッチは社会の秩序、国家の秩序を重んじ、なかんずく過去の秩序を理想とし絶えずその再建を志向しているのであるから、私は、なるほど新しい秩序の建設を士官に求めたけれども、それは貴族国家の体制の維持にあつたとみなしたい。小説に描かれた一領国も崩壊過程をたどりつつある貴族国家の再編成が試みられている様とみることができよう。クループスカヤはかの「国民教育と民主々義」のなかで、ペスタロッチの民衆教育と労働教育をヨーロッパの経済発展のなかで正しく分析しつつも、領主や牧師や教師は善良な人間

であり、民衆の不幸の源泉とそこからの救済を説明するために作者に役立っている人形にすぎないと述べているが、教育と政治の関係を追求するばあいにはこのような人形のうごきに注目しなければならない。

たとえば小説第4部において、公国の国務大臣ビリフスキー伯爵 Graf Bylifsky が評判の学校を参観し、士官グリューフイの学校教育の成果を賞讃しつつ次のように述べている。「上位者は人間を評価するとき、その人間からどれだけ利益をひき出せるかということを基準にし、また現実のいっさいの立法を内から動かしているものは、あらゆる国家を君主のためにできるだけ繁栄させ、そこに生活している人々をこの究極目的のため最もうまく利用し、できればそのために陶冶し導くということにほかならない。

(Ⅱ. s. 404) それには民衆の経済向上が必要であり、伯爵はこのような見解にたち現実的収益と労働能力の増大に役立つボンナル村の学校教育に満足し、それを全全国に採用する法律の制定を考えるに至るのである。これは当時の貴族の啓蒙政治の一つの姿であり、我々は近代公教育成立の一端をここにみることができよう。

同様のことは「小説」に現われたリアリズムの他の重要な側面をなす法律制定についてもいうことができる。そこで次に立法の問題にふれたいが、この問題についてはペスタロッチは学生時代から法律学を専攻したりして関心を示しており、「小説」で取り扱う以前にも「立法と嬰兒殺し」(1783)や「スイス週報」のなかの「刑法制定についてのアーナーの意見」(1782)などの論文を発表している。したがってペスタロッチの立法思想を論ずるばあいには当然そこにも言及しなければならないが、紙数の制限上それは不可能であるので、いずれ稿を新にして論ずることにして、ここでは小説第4部で語られている立法思想のみについて簡単にふれておきたい。

そこでも領主が立法の必要性を認識してそれを士官に依頼しており、立法の根拠を明確にするため既に若干述べておいた士官の人間観がここでより徹底した内容をもって示されている。

士官は人間の本性 *Menschennature* についてきわめて注目すべき見解を次のように述べている。「人間は放任され野生のまま生成したなら、おのずから怠惰で無知で軽薄無思慮で何事も信用せず、臆病で限りなく貪欲なものとなり、弱さからくる危険や貪欲からくる障害のためますます卑屈で狡猾で陰険になり疑い深く暴力的になり、無鉄砲で執念深く残忍になる。……それが人間の本性である」。(Ⅱ. s. 420) 士官は人間本性のうちに衝動 *Trieb* と我欲 *Selbstsucht* をみたのである。このような人間観は「探究」に示された人類発展の過程における「墮落した自然人」に通じる「低き自然」*"niedere Nature"* (F. Delekat) の系列に入るものである。

しかもこのような自然人は同時に現実社会の人間であり、このような人間は「社会にとって全然役に立たないだけでなく甚だ危険で耐え難い存在」(Ⅱ. s. 421) である。したがってこのような人間を社会生活に適応させ社会の秩序を保持するには、自然的人間と全く異った要素が必要となる。それは「施設、道徳 *Sitten*, 教育方法、法律」であり、それらによって「人間の最初の衝動を抑圧し、秩序のうちへ入れるための人間を奥底から変えることができる」(Ⅱ. s. 421) のみである。しかも、制度や施設や法律は単に形式的なものではなく、「人間から全く他のものを作るには、人間の本性を深く認識した立法者の完全な叡知」(Ⅱ. s. 422) が必要であり、かかる為政者の政治的叡知により内実を得てくるのである。そしてそれにより初めて民衆は市民としての使命 *die buergerliche Bestimmung* を遂行することができるのである。このようにペスタロッチは人間性に合致しそれを向上させるという使命を法律に与えたのである。彼の理想とする法律は禁止と刑罰の法律ではなく、人間の内面的な向上を希うすぐれて教育的なものである。

このような見解に従って領主は民衆と更に深く接触し、「所有欲、性欲、快楽の追求、休息への性向および名誉への性向」(Ⅱ. s. 515) という五つの根本衝動をあげ、それらを制限して市民的秩序の規範と結合した法律を制定した。

また領主は経済問題のエキスパートとしてかの紡績業者メイヤーを新代官に任命し、民衆の経済生活の安定と向上を期待したのであった。新代官は移りゆく農村の経済状態を詳細に検討し、事態に即した経済政策を施行したり、必要なあいには立法化を計画したりして農村経済の再建を試みている。このようにしてパスタロッテは民衆救済と社会改善の道を現実の姿として描き、当時の為政者たちを啓蒙しようとしたのである。

ところで、士官の教育思想と立法思想の前提となる自然状態の叙述は、かのホップズの「万人は万人の狼」“homo homni lupus”という状態にも等しいものであるが、ホップズにおいては各人が平等に有する自然権を自己の生命保存のため理性により互に譲渡し、相互の契約により国家が成立するとされているが、パスタロッテにおいては自然状態の人間は野生の動物と変わりなく、みずからの力で社会の秩序に入ることにはできない。しかも逆に国家を統治する君主は絶対最高の善をもつ存在として描かれ、君主の叡知により人間は作り変えられ国家の秩序の枠の中へ入れられてゆくのである。かつての「夕暮」では国家の秩序は自然の秩序であり、個の内的自然と国家は美しい調和をなしていたが、現実社会に眼を向けることにより人間性が破綻をきたした「小説」においては、個人が国家に調和させられる結果になっている。そこでは未だ政治悪・国家悪は認識されていないのである。

#### 4

ホイバウムも指摘するように、パスタロッテにとりボンナル村の再建には民衆教育と法律制定のみでは十分とはいえず、依然として宗教問題が残りが最後の役割を果しているのである。たとえば、領主アーナーは一方では立法を重視しつつも、「いかなる立法的叡知も地上の永遠の不幸の源泉を除去できない」(II. s. 550)と語り、政治のもつ限界から民衆に神への信仰と神の祝福に感謝するための誠意と努力を教え、民衆を永遠に救済しようとした。そこで私も最後にパスタロッテの宗教観についてふ

れ、それを政治とのかかわりあいについて述べておきたい。

小説後半部では、現実的で行動的な士官の牧師批判や人間観の転換から、パスタロッテの宗教観も変質していることはいうまでもない。牧師の民衆教化の方法も「行為における修練がことばによる修練よりも優れているという真理に従い」(II. s. 214)変化している。宗教観もまた「宗教は我々人間の創造者への帰依により、肉と血を制する精神の努力にほかならない」(II. s. 291)ということばに示されているように、「精神の肉体にたいする支配」“Herrschaft des Geistes ueber das Fleisch”<sup>注14</sup>と化しているのである。

愛に関しても同様である。牧師の言によれば「愛の神 Gott der Liebe は愛を現世の秩序に結びつけた」(II. s. 564)のであり、人間は現世における実践のなかで愛を実現していかねばならない。愛は「現世の重荷を担い、現世の不幸を和らげ、苦悩を取り除く人間の力のうちにあり」(II. s. 564)、市民生活において自然的衝動を克服し、市民としての使命をはたすという行為のうちにある。このようにして牧師は「市民陶冶の原理を宗教概念に結合した」(II. s. 565)のである。

しかしこのような日常的行為における誠意努力は、神の愛と神の導きなしには不可能である。「人間は神の愛のうちにあって自己を高め、自己を犠牲にし、狂暴な衝動を克服して自己の完成を見出す」(II. s. 539)のであり、ここに絶対者としての神の存在が要請されるのである。自然的存在としての人間が社会生活において自己の衝動を克服し自己を醇化するには、神を信じ完成へと努力することが必要であり、そこに宗教の存在価値を認めるのが「小説」におけるパスタロッテの立場である。それゆえ宗教は道徳的・教育的な色彩をおびているのである。

次に政治との関係について述べると、パスタロッテは「いかなる立法家も神なくしては仕事ができない」(II. s. 539)と為政者にも信仰の必要なことを説き、このような観点から民衆へ



の配慮を自己の義務と強く自覚する領主はいっそうあつく神を信じるのであった。このように宗教は政治を内面から支える役割を担っており、政治は宗教的性格をもってくるのである。政治の理想は絶対者の意志を地上に実現することであり、政治の正当性の根拠はここにある。ペスタロッチは、宗教は「時間と永遠 Zeit und Ewigkeit を一つに結びつけ、神と国家 Gott und Staat に同じ祭壇で奉仕するもの」(II. s. 370) であるというが、現在の政治を永遠普遍の価値に連るものにするのが宗教である。そのため宗教は神と同時に国家に奉仕すべきものとされており、国家は神と同一視されているのである。国家の意志は神の意志であり、領主の政治の究極目的は地上に神の意志と一致した神の王国を実現することであったということができよう。そのために領主はみずから「キリスト教的君主」“der christlicher Unker” たらんと努めたのである。

ペスタロッチの思想には神の国と地上の国、神の意志と現実の政治の楽天的な一致を説く中世的な国家観が依然として温存されており、近代的視点からの国家悪は未だ問題にされるには至っていない。その点かれの政治思想には理想主義が続いているといえよう。それはシュタインが「貴族的楽天主義」“der aristokratische Optimismus” と呼んでいるように、理想的貴族政治の姿であり、そこにペスタロッチの政治思想の時代的制約をみることができるのである。というのは、ルソーの思想の影響を受けつつもペスタロッチが革命思想に走らなかったのは、かれが当時のスイスの貴族や上流階級の人々と深く接しその影響を受けていたからである。それによりペスタロッチの思想は啓蒙貴族による上からの民衆救済という色彩が濃厚になった。彼の眼には民衆は新しい秩序を創造するエネルギーとしては映らず、むしろ民衆は為政者の善意と叡知によって救われるべき存在であった。そしてその典型的な姿をこの小説で描いて当時の支配者にたいし啓蒙的役割をはたそうと努めたのであった。(X. s. s. 525~526)

ペスタロッチの政治思想は歴史的には、プロ

シヤやオーストリアなどの諸国の領主が18世紀半ばより農民層の分解にたいし種々の保護政策を行ったかの専制啓蒙政治を思わせるものがある。かれの思想がこうした歴史的状況のうちにあるとき、そのもつ限界もまたまぬがれ難いことである。ちょうどカントが理性的啓蒙主義の立場にありながら、「現代はまさに啓蒙の時代、即ちフリードリッヒの世紀である」と、プロシヤの啓蒙専制君主フリードリッヒ大王を讚美し歴史的限界を示したと同じように。そしてペスタロッチの教育思想も、民衆を基盤とする国民教育の発展と労働を中核とする労働教育の推進という側面は近代的性格をもち、近代教育への貢献大なるものがあるが、他面以上考察したように政治との関係からみれば保守的役割を演ずるといふ二重的性格を示しているのである。(未完)

## 〔注〕

1. 鳥根大学論集(教育科学)第11号  
拙稿「ペスタロッチにおける政治と教育(1)」
2. 本論文の原典は H. Pestalozzis gesammelte Werke in 10 Bd., hersg. v. E. Bosshart, E. Dejung, L. Kempfer u. H. Stettbacher. (1944~1947) による。
3. A. Stein ; “Pestalozzi und die kantische Philosophie.” (1927)
4. 「夕暮」の善の世界と「小説」の悪の世界の対照に注目している研究書に次のようなものがある。  
P. Natorp ; “Pestalozzi. Sein Leben und seine Ideen.” (1913) s. 13.  
F. Delekat ; “Johan Heinrich Pestalozzi.” (1928) s. 106.
5. P. Natorp ; a. a. O. s. 14.
6. 第2部におけるこのような環境論 (Milieuge-danke) についてデレカートは「それ(環境の叙述)はむしろ、個人の生活方向が規定されている社会的条件を明るみに出すという動機から生じている」と述べている。  
F. Delekat ; a. a. O. s. 134.  
ここから逆に教育的な環境が必要とされるのであり、このような思想をシュプランガーは環境教育学 Milieupaedagogik に通じるものとしている。

- E. Spranger ; “Pestalozzis Denkformen.” (1947) s. 40.
7. このような発展はペスタロッチ研究者の等しく注目するところである。
- A. Heubaum ; “J. Heinr. Pestalozzi.” (1923) s. 125.
- A. Stein ; a. a. O. s. 52.
- F. Delekat ; a. a. O. s. 164.
- E. Spranger ; a. a. O. s. 41.
8. E. Spranger ; a. a. O. s. 6.
9. ホイバウムは、ペスタロッチにおける職業陶冶と人間陶冶は矛盾対立するものではないと特に指摘している。彼の述べるようにともに言語教授に反対するかぎり「夕暮」と「小説」の教育観に共通性はみられるが、私はのちの基礎教育観にみられるような統一性はここでは未だ示されていないと思う。
- A. Heubaum ; a. a. O. s. 133.
- シュタインもこのことに関し従来の研究を次のように紹介している。まずローストは (W. Rost ; “Pestalozzis Lienhard u. Gentrud”. 1909) 人間陶冶の理想は「探究」において完成しており、「小説」では職業教育という傾向が強いという。ホイバウムは人間陶冶の理論を発展史的に考察しようとしている。しかし、ナトルプやウィゲット (T. Wiget ; “Grundlinien der Erziehungslehre Pestalozzis.” 1914) は「夕暮」の人間陶冶の思想の連続性を強調している。
- A. Stein ; a. a. O. s. s. 61~62.
- いずれにしても検討を要する問題である。
10. P. Natorp ; a. a. O. s. 16.
11. クループスカヤ著「国民教育と民主々義」(勝田昌二訳、岩波文庫) 39頁
12. ホッブス著「リヴァイアサン」(水田洋訳、岩波文庫) 208頁
13. A. Heubaum ; a. a. O. s. 145.
14. E. Spnanger ; a. a. O. s. 41.
- シュプランガーはまたこのような宗教を「人間性の宗教」“Humanitaetsreligion” という。
- E. Spnanger ; “Pestalozzis Nachforschungen.” (1935) s. 22.
15. のちにフランス革命を契機に著した「然りか否か」(1793)においては国家悪がかなり明確に認識されており、ペスタロッチはそこで国家権力と宗教は分離すべきだと主張している。
16. A. Stein ; a. a. O. s. s. 33~39.
17. カント著「啓蒙とは何か」(篠田英雄訳、岩波文庫) 16頁